

オフィーリヤ弁護

鈴木 洋

シェイクスピアの悲劇作品の中で我々は幾多の犠牲者たちに出会うわけであるが、その死が当然の報や結果であると納得出来かねる場合が少なくない。善因善果、悪因悪果として我々の常識的判断に素直に納まり切らないのである。実際、真の悪党や致命的な欠点を持つ主人公のみならず、辛抱強い有徳の男性や健気で愛らしい女性達が明白な欠点落度があるとは思われないにもかかわらず実にむごたらしい最期を迎えているのを見ると、いわゆる「詩的正義」なるものの発動が不発に終わっているのではないか、もしくは不完全で不適當ではないのかという疑念が残りそれを払拭することは容易ではない。余程の変人かあるいは自称現実主義者ならば、被害者学とか犯罪心理とかを援用して、犠牲者は自らその結果を招いたと主張出来るのだろうか、そんな都合の良い知識とは無縁の当り前の読者は、例えば『オセロ』のデズデモナ、『リア王』のコーデリヤ、『リチャード三世』の幼児たち、『タイタス・アンドロニカス』のラヴィーニヤ、そして『ハムレット』のオフィーリヤなどの不幸に対しては暗然たる思いを禁じ得ないのである。

こうした不満と疑問は、現代の一般的な読者（観客）の素人くさい印象であるとして安易に片づけてよいものではなかろう。何故なら、「幼稚な」印象はシェイクスピア悲劇の世界が常に内包している一面の事実に由来するものであり、従ってこの当然の疑問は古い時代から再々指摘され表明されて来たものだ

からである。従って問題はむしろ、不当な運命の手に陥ちた者たちの悲劇を十分に、適切に考慮して来なかったという事実であると言ってよからう。不幸な犠牲者たちは悲劇作品の主人公ではないという理由から当然の如くに不当に軽視される運命を甘受して来たわけであって、例えばデズデモーナの死は、オセロの、より深刻な大悲劇にとって必要な要素に過ぎないという如き考えである。しかしデズデモーナの存在は副次的なものではないし、彼女の不幸がオセロの不幸より軽度であると言うわけにはいかない。無実を訴えつつ夫の手で縊られて息絶えるデズデモーナの事を考えれば、シェイクスピアの世界は無道徳であり正邪は不明瞭であると語ったジョンソン博士の言葉を、あながち伝統的な古い道徳観に縛られたものだとして拒むことは難しい。

シェイクスピアは便宜のために美徳を犠牲にし、教化を軽んじて娯楽を指向する故に、道徳的目的を持たない如くである。……その教訓と公理は詩人の心を軽率に離れて善悪の配分が不当となる。有徳者において悪人を排除する意志が不明のままであり、人々を善悪の境を無雑作に往来せしめ不注意に終幕する結果、その教訓の発露が恣意的となる。作家の責任が社会改良に存する事実、及び正義は時と処を超えた美徳であるが故に、かかる欠点は詩人の時代の野蛮性によって免責され得るものではない。⁽¹⁾

ジョンソン博士の上例の言葉に我々が不満を抱くとすれば、社会規範についての博士の不動の信念に対してであり、また文芸作品に専ら社会教導の責務を求めているかに見える点であろう。

しかしその一方で、現代の批評家のシェイクスピアの「無道徳性」に対する態度は博士のそれと対極的な意味において問題なしとし得ないものであり、悪を排除否定することなしにそれを現実の一面として安易に受け入れてしまう態度である。例えば、デズデモーナの死について K. ミュアは、彼女の死を悼む

者に向っては「哲学も宗教もそうした災厄から我々を守り得るものではないのだと反論することが出来る。」²⁾と述べる。こうした考えに従えば、シェイクスピアは在るがままの現実を無批判に提示しているということになり、その演劇的世界は人間が日常的に経験する現実であり過去から現在まで変ることなく続いている真実にほかならないこととなる。また、同じようにしばしば唱えられる説としては、シェイクスピア悲劇の眼目は偉大な主人公の悲劇を描くことに在り、それ故例え主人公が殺人者であっても主人公であるが故に真の犠牲者であると考えることによって、主人公以外の哀れな犠牲者の存在を合理化してしまう考え方が有る。この考えに従えば「観客の反応」として最も重要なのは悲劇の主人公が劇的に提示されることだということである。この解釈には一理あることを認めざるを得ないけれども、しかし同時に、例えばデズデモナの死やオフィーリアの変死は「観客の反応」を喚起する点において主人公の死に劣らないという事実があるであろう。読者（観客）はオセロやリア王の強大な個性に圧倒され、イアーゴの「無動機の動機」に惹きつけられ、マクベスを「犠牲者としての殺人者」と見做すことに強い魅力をおぼえはするものの、殆ど何の罪も落度も無いと思われる哀れな者の存在が主人公の悲劇を際立たせるためだけのものであるとは強弁し得ないはずである。それでも尚、いや、デズデモナは罪を犯したのだと主張する人は必ず居るであろう。そしてその罪とは父親の意志に逆らって「黒い牝羊」のムーアと結婚したことなのだと主張するであろう。しかし哀れな犠牲者は病気や事故で死んだのではなく自身の夫の手で、無実のままに扼殺されたのである。それでも尚かつデズデモナに責任があるのだと言うならば、確かに「ハンカチの悲劇」という別称があることからして、ハンカチの取扱いについての不注意が在ったと言えるのかも知れない。

しかしながら、ことオフィーリヤについてだけは如何なる具体的な罪咎も見当らないのではなからうか？ 第一、デズデモナとは違ってオフィーリヤは

父と兄の忠告に素直に従っているのである。だが、現代の多くの読者たちは彼女が父兄の意見に従ったことが悪いのだと言う。彼女が親の忠告を受入れたこと、そしてハムレットの誠意ある味方とならなかったことを重大な過失であると言う。しかし、古い時代の高位官廷人の子女が親の言に服することは当り前のことであったし、なりよりも注意すべき点は、オフィーリアの言動がハムレット王子を絶望に追いやったという一般的な解釈にしてもテキストを読む限り不動の解釈であるとは思われないことである。

にもかかわらずオフィーリアに対する評価が従来より不公平と思われるまでに厳しい事実には驚かざるを得ないのであるが、思うにオフィーリアのマイナス評価の基本には彼女が近代的な自立精神に抵触する人物であるという面が関係していると思われる。近代的な自我確立を絶対的に是とし、それに反してそうでない者、消極的で判断や行動が不安定な者を一律に低く評価する現代人特有の考え方に照せばオフィーリアの不人気は仕方がないのかも知れない。現代人、わけても現代女性のお気に入りにはポーシャ姫のような女性なのであるから、オフィーリアを十六世紀宮廷人の深窓の子女として受け入れた上で、テキストを注意深く読むことを潔しとせず、J. D ウィルソンの不公平で否定的なオフィーリア論に賛意を表することになる。

ハムレット王子は、本能的に、唯一人それが可能であるところのオフィーリアに助力を求めるのだが、彼女はそれに応え得ない。王子の発する悲痛な嘆息は、王子がそのことを了解したということと、二人の間が終ったことを示すものである。かくしてオフィーリアは王子を拒み、彼の究極の要請を無に帰せしめた。⁽³⁾

同じような見解は I. リブナーの、「オフィーリアはハムレットが最も必要とした折に何らの支援をも王子に与え得ないのだが、そもそもオフィーリアの劇

中における唯一の役割というものが王子を見捨てることなのである。』⁽⁴⁾ という評言に窺われる。リブナーは、従って我々は「王子のオフィーリヤに対する冷厳なる対応を理解し得る。」と言うのである。

このようなオフィーリヤ否定論は、その是非を別とすれば、劇中の彼女自身の言動と、他の人々のオフィーリヤに対する言動とに由来することは論をまたない。オフィーリヤ自身の言動については後に詳述することにして、劇中の他の人物のオフィーリヤに対する言動を考えてみても、例えばほかならぬ父親が、娘をあたかも軽薄な尻軽女を説諭するかのような口調でハムレットとの交際を禁じているのである。

そうさ、馬鹿鳴を捕えるための罠だよ。血が燃え盛ると人の心は何でも構わずの好い加減な誓を口に出すのさ……処女の身としては、多少お目どおりを遠慮するのが上策さ。⁽⁵⁾

(1.3. 115—121)

ポーニアスのこんな注意を端の者が耳にすればオフィーリヤの中に「危険な情欲」やら「燃え立つ焰」やらが渦を巻いているのかと思うことであろう。また、ハムレットにしてからが、「尼寺の場面」における彼のオフィーリヤに対する言葉遣いには耳を覆わせるものがあり、最低最悪の売笑婦が持つ悪徳の数々をあたかもオフィーリヤ自身の中に現に目撃しているかの如く苛烈をきわめる内容であることは周ねく知られている通りである。

加えて、「狂気の場面」でオフィーリヤが歌うヴァレンティンの俗謡の内容が彼女の貞潔に対して疑問を招きかねないものであることから、サルヴァドル・ド・マドリヤーガやレベッカ・ウェストなどから卑俗に過ぎるオフィーリヤ像——既に王子に誘惑された娘であるか、或いは少なくとも「劇中劇の場面」や「壁掛けの場」でのハムレットの性的な言及に敏感に反応する肉感的な娘で

ある^[6]——が提出されている。

しかしウェスト等のオフィーリヤ解釈は全く誤りである。「狂気の場面」のシンボリックな意味を把握し、同時に狂乱のオフィーリヤが口にする歌の内容を正しく理解し、彼女の死を悼むガートルードの哀切な言葉などにも注意を払うことによって、その解釈は十分訂正され得るものなのである。即ち、第一に、「狂乱の場」は、オフィーリヤの死に象徴されるところの、あらゆる清純なものの存在の喪失を奏でる感傷と抒情のシーンであって、撒き散らされる野草の花はオフィーリヤを含む無垢なるもののシンボルであり、彼女の狂乱は無実清純な者の心を痛めつける残酷な現実(「牢獄のデンマーク」)を示唆するものであることを明確に認識しなくてはならない。第二には、オフィーリヤの恋歌の性的言及は、実は父ポローニヤスと兄レアティーズの世知辛い犬儒主義や打算、さらにはハムレットの深刻な女性不信、性嫌悪と幻滅感とがオフィーリヤの未熟でイノセントな心を痛めつけ錯乱させ、その錯乱の中にハムレットへの愛の願望が混乱した姿で露呈し来たったものなのであり、決して本来的に彼女の心性に潜んでいる肉欲性の表現なのではない。従ってレベッカ・ウェスト等が恋歌の意味をオフィーリヤの性的属性を暗示するものと受け取り、それ故に彼女を墮落せる者の如くに解釈していることは浅薄な理解と言わざるを得ないのである。この事実に関しては、ヴァレンティンの恋歌の歌詞の人称と時制の変化を分析し、その性的言及がオフィーリヤ個人の属性を示すものではなく、従って彼女を性的にルーズな乙女であると考えることの不当性を論じた R. S. ホワイトの異色の且つ示唆的な見解に照らしても明らかであろう。^[7] ホワイトの分析によれば、

この歌には第一人称から三人称への興味ある転化がある。恋歌は先ず現在形で「明日は十四日、ヴァレンティン様よ」という句で始まり、そのあと第一人称で「貴男の窓辺に私が立つの、私は貴男のヴァレンティン」と続くが、しかしこの定型的表現があたかもその人称と現在時制の故に余りに身近かに

過ぎるのを修正するかのように第三人称構文に変化してゆく。

男は起きて着物着て／開ける部屋の戸／娘は中へ、出てゆく時は／もう生
娘じゃない

(4. 5. 50—53 沢村寅次郎訳)

こうして、三人称へ変った為に歌は普遍的な民謡調に変化し、こうしたことが大昔から繰り返されて来た事実であることを示すのである。つまり、オフィーリヤとの関連性で言えば、彼女はハムレットのヴァレンティンとして王子の窓辺に立ちあはするが実際には入室しなかったことを示している。彼との恋愛関係に憧れるオフィーリヤの願望が「娘」という第三者に託されているのである。これに続く第二の詩は「悪いのは誰か？」という質問形となるが、こうした事柄の習いとして男の側が責任を問われる。

思い立っては／男の常か／ほんにつれなやその仕打ち

(4. 5. 58—9)

しかし男は屁理くつを捏ねて二人の間が終結したのは女の責任だと突き放す、

恥しやあの転び寝も／夫婦になると言ったりやこそ／そう思ったのも嘘じ
ゃない／お前と寝ない前にはな。

(4. 5. 59—64)

この興味ある鋭い分析を通してホワイトはオフィーリヤが疑い無く処女の身のままで死去し、それ故にこそ「乙女の散華」(5. 1. 226) や「処女の花環」(5. 1. 227) をもって埋葬されているのであると指摘するが、その見解は誠に正当で

あると言わなければならない。即ち、恋歌全体が暗示している事はオフィーリヤとハムレットとの関係が彼等を取り巻く世界の野蛮性と悪徳とによって破綻した事実が付随する不透明とあいまいさを暗示しているのであって、オフィーリヤの不身持ちを表現しているのではないのである。そして同時に、この俗謡は人称と時制の変化が生んだ不透明とあいまいさの為に、オフィーリヤが採り得たかも知れない行動の選択肢と彼女の心理的不安動揺をも暗示している。民謡の「娘」のようにオフィーリヤはもう少し大胆に振舞うべきではなかったか。父兄の圧力、つまりデンマークという抑圧的な悪の権力に服従せずに彼女は自分の愛を貫くべきではなかったのか。

しかし為し得たかも知れないことを為さなかったといってオフィーリヤを非難することは正しくない。その理由は、基本的にはこの複数の可能性は若い二人を取り巻く環境の不透明さの反映だからである。正しい方途や選択がとざされている社会に身を置く不仕合わせな男女の在り方の投影だからである。つまり彼女の行為がハムレットを絶望させたとしても、その絶望の半面にはデンマークという国におけるハムレット自身の存在の様相が深くかかわっている。いわばハムレットの社会的存在性がオフィーリヤに対する彼自身の姿勢を規制し、次いでオフィーリヤの王子への態度をも規制している。具体的に言えば、ハムレットの絶望は母親の早過ぎた再婚に深く関連し、母の再婚は母の社会的な存在に由来している。そしてまた二人の若い男女の間に生じる不幸な誤解は権力的で抑圧的な環境の下での止むを得ざる結果だと見られるのである。

従ってハムレットは叔父クロードの犯罪に対して確信を抱くよりはるか以前に母親の再婚が契機となった深い憂愁と社会と人間に対する根本的な疑念にとりつかれているのであるが、しかし、大岡昇平が正しく洞察しているような王妃の社会的な弱者の立場に思いを至すことは彼には出来ないのである。

まだそなたはわからないのか。今は王室領に御自身の王弟領を加えてデンマ

ークーの大領地を持つ強大なクロードィアス王、かよわい母の身で逆うことはできません。^[8]

大岡氏が想像しているような上例の如き台辞は「ハムレット」の中には実際は無いのであるが、このような言葉をガートルードが口にしても当然であるような状況を斟酌しようとしないうちに王子の特徴が見られるのであって、王子は母親の早過ぎる再婚の中に一人の女の性だけを見て、結婚が有する他の側面には目を閉じてしまう。さらに、母親の例をもってオフィーリヤを含めた女性一般に対する不信と性嫌悪にとらわれてしまうのである——「弱き者よ汝の名は女なり。」このように一例をもって一般例としてしまう王子の思考の特徴はコールリッジの指摘するところであって、^[9] 母親の再婚によってハムレットの女性観は著しく屈折しシニカル度を深め、同様にデンマークの権力構造の桎梏とその下にうごめく人間の行為の観察によってその人間観と社会認識は極端に狭隘となり尖鋭化し、本来は悪意のない愛すべき老人であるポロニアスをも性急に殺害するような不幸をひき起すのである。ガートルードにしても、ハムレットの見方から少し離れるならば、オフィーリヤと息子との結婚を夢見る優しい普通の母親であり、哀れなオフィーリヤの死を悼むガートルードの言葉は真情に溢れ、聴く者を深く感動させるのであって、「一人の無知なる読者」を自称するウルリッヒ・ブレイカーなる十八世紀のスイス人は、「ハムレット」を読んだ感想として、「ガートルードはオフィーリヤを悼むこの感動的な言葉を述べた。例えほかに何もせずとも。」^[10] と、極めて常識的であるが、しかし正当な感想をもらしたのであった。このように考えると、先王ハムレットの亡霊がハムレットに向って「母親のことは天に任かせておけ。」と諭しているのは、息子のこうした均衡を失なった思考傾向を先刻承知していたことではなかったかと思われるが、オフィーリヤに対する冷酷な態度と辛辣な言葉に至っては、オフィーリヤが王側に走ったと彼が判断したためであるにしても余りに

酷烈であって、「王子のオフィーリヤに対する態度は同情に価する。」⁴⁴ という I. リブナーの考えには容易に同意し得ないものがある。

そもそもカオフィーリヤと王子との関係を考える場合に第一に明確にしておかななくてはならないのは、オフィーリヤの王子への愛情は一貫して変りなく真実のものであったという点である。彼女は心から王子を愛し尊敬し、愛する乙女の例にもれず王子への願望を様々に夢想していた。しかし彼女は王子が自分に示す種々の愛情表現をどう判断してよいのかわからず、従って自分が採るべき態度を決めることが出来なかった。一個の女性としての、また一個の恋人としてのこの未熟と判断力欠如は確かに咎められるべき彼女の欠点であると考えられるものではあるが、しかし未成熟な恋人というものは世に数多いのであって、その未熟さ故に直ちに責められるべきだということにはならないはずである。彼女は未熟であるからこそ長上の者たちに教えを求めたのであって、父に対して王子の態度がどういうものであるのかが「私にはわからないのです。」(1.3. 104) と明し、結局父の指示に従って暫時王子から遠ざかるように心掛けたことが重大な過失であったと決めつけることは出来ないだろう。

父と娘との間のやりとりから判断するなら、先王ハムレットの死と母ガートルードの再婚との間に介在する二ヶ月の期間にわたって、王子が様々な形でオフィーリヤへ愛情表現を続けていたことは明白であり、ポローニアスの言葉にも (1.3.91)、オフィーリヤの言葉にも (1.3.99)、王子が「近頃たびたび」言い寄ってくるという事実がのべられている。従って王子のオフィーリヤへの態度に見られる著しい変化は明らかにオフィーリヤが、「お父さまのお言いつけ通りに、殿下のお手紙を押戻して、ご交際をお断りしました」(2.2. 142-143) ことが引き金になっていることは明らかである。そして王子が失恋した事は、恋の痛手が被るあらゆる伝統的な徴候をあらわにした身装と態度で⁴⁵ オフィーリヤの部屋に闖入した (2.1.77-84) ことによって明らかであるだろう。

仮りに一步譲って王子の失恋に疑問があるとすれば、このバートン流の失恋

者の徴候が王子がかねて表明していた意図的な佯狂（1.5. 165—180）であるか否かという点なのである。しかし王子が後になってお前を「一度は愛したこともあった」（3.1. 115）とオフィーリヤに言っている事実と、また「葬儀の場面」においてレアティーズに対抗してオフィーリヤの墓穴に飛びこみ、「四万の兄がその愛情を全部集めても到底私の愛情に及ぶまい。」と（5.1. 263）絶叫したことを考えれば、王子の第二幕一場における失恋の狂態は単なる佯狂と取ることとはあまりにも不自然であろう。結局はオフィーリヤの部屋に闖入したときの王子の失恋者の有様は、クロードィアスをあざむかんが為の佯狂と、オフィーリヤへの真実の恋の破綻がもたらした狂乱とがない混ぜになってあらわれたものと考えることが最も自然であり妥当なのである。従って、王子の狂乱を失恋の痛手の故とだけ考えたポローニウスは事柄の半分だけを把握していたことになるし、またオフィーリヤは父と兄の指示通りに王子を遠ざけた結果、思いもかけぬ王子の狂乱の態度を招来してしまったことに強い不安とおそれをおぼえることになったのである。

父と娘の、この事態認識の誤りはしかしながら誠に無理からぬものなのであって、二人ともハムレットが亡霊に会って復讐を契わされたこと及びハムレットの人生観（とくに女性観）が母親の再婚によって根底から揺がされていたということを知らなかった。ただ一点留意すべきは、オフィーリヤが父と兄の指示に従って暫時王子との交際を遠慮した折に、その時同時に王子の自分への愛情の真偽がそうすることによって確認出来るだろうという期待が込められていたことである。この期待についてオフィーリヤが言葉によって表明している事実は見当らないが、その後の王子の変貌と王子との決別によってオフィーリヤが完全に動揺し、王子の身の上を案じて身を揉んでいる様子から判断すれば、オフィーリヤには王子との間を終らせてしまう意志は全く無かったこと、むしろ父の教示に従いながらハムレットとの交際の進展を待ち望んでいたことには疑問の余地がない。であるからこそ、思いがけずも王子の狂乱を招いてしまっ

たと考えた彼女の胸は不安と後悔とによって押し潰されるのであって、彼女に出来ることはただおろおろと王子の狂気を案じそして神に祈ることだけなのである。

他方ハムレットは単純で子供のようなオフィーリヤが、突然自分が渡した恋文を返してよこして今後は会うことが出来ないと言い出したことに疑念を抱き、彼女の行為は誰か他の者の指示によるものだと疑って、当然ではあるにしても最悪の事態——オフィーリヤが王の側に走った——を想定してしまうのである。しかしこの時点ではハムレットの疑念は未だ決定的な結論に到達していたわけではなかった。即ち父の言いつけに従いオフィーリヤが「殿下のお手紙を押戻し、ご交際をお断りし」(2.2. 142—143) た時以後のハムレットは、王を誑すための佯狂とも、恋の痛手故の狂乱ともつかぬ動揺と絶望の唯中であって、「限られた生身の己の一身の上に全世界の条件を引き受けて」⁴⁹ 呻吟していたのであった。

かくするうちにハムレットは母親の中に読み取った罪と腐敗をオフィーリヤの上に投影して考えるまでになって来ていた。幻滅、性嫌悪、無力感はますます深まり、自身を憶病者と見る脱力感の中で王子は我知らず自殺への願望をもらすまでに虚無的になっていたのである。実際、ハムレットが計らずもオフィーリヤに遭遇したのは、とりわけ深刻な絶望感に浸って、「生きるか、死ぬか、それが問題だ」(3.1.56) とつぶやき、心の中のありったけを吐き出し、事のついでに自分の命をも出来れば何処かに吐き捨ててしまいたいと願っていた、まさにその直後のことだったのである。

この時オフィーリヤは、王子の意中を探ろうと帳の背後に身を隠した王とポーニアスに言いつけられて、「勤行の振り」をしつつ王子が通りかかるのを待っていたのであった。しかしハムレットはオフィーリヤが本当に勤行しているものと受け取った。彼女は父の言いつけに従い「勤行の振り」をしていたはずなのであったが、当初の動機はいざ知らず、いつの間にか彼女はほんとうに

王子の身の上に思いを馳せそして王子の為に祈っていたはずである。

そうでなくば何ごとによらず「seem」と「being」を見抜いてしまうハムレットが彼女の「振り」を見抜かぬはずがないのである。また同時に、オフィーリヤが父の言いつけに従って王子を待ち受けることに同意したのも、半ばは彼女自身が王子に会い度い、そして王子の病気の原因を知りたいと思う気持があったからのことである。してみれば彼女の祈りは真実であり、それ故にこそハムレットはそれを真の祈りと見て、「あなたの祈禱の中で私の一切の罪の赦しを忘れずに祈って下さい」(3.1.89)と真顔でオフィーリヤに頼んだのである。

しかしオフィーリヤとハムレットの会話があたかも祈禱の余韻に包まれるかのように穏やかであったのは、この依頼の言葉に続く挨拶のための二行だけで突然終わってしまう。そしてその後が続くのはハムレットのオフィーリヤに対する、弱者を玩ぶかのような当て擦りと皮肉とであり、遂には最低最悪の娼婦が持つ悪徳と不品行を眼前のオフィーリヤの中に見るかのようにあげつらった後で、「尼寺へ行け！」と鋭く言い放つのである。だが、「尼寺の場」におけるハムレットの語調の突然の激変は、それが唐突で激しいものであるだけに、却って明白にその時点までのハムレットの心理が如何なるものであったかを余すところなく示している。即ち、その瞬間までのハムレットの心は相変らずの自己嫌悪と絶望の呻き、それに今や習慣ようになった女性呪詛に沈潜していたのであって、まさに丁度その時オフィーリヤの勤行の姿を見、一瞬の静寂の中に清明なものを見た思いがして、乙女の祈りに我が身の罪障消滅の願いを托したいと思ったのである。しかしそれも束の間、オフィーリヤはハムレットの疑いを掻き立てるような言葉を発してしまう、「あなた様から頂いた記念の品をかねてからお返ししたいと思っておりました。」(3.1.93-94) ハムレットはこれより以前に彼女から同じような言葉とともに自分が送った恋文を返却され、彼女の誠意を疑問視したのであったから、今再び自分が贈った品を押し戻されて、

今度こそはっきりと、オフィーリヤが王側に走ったのだと瞬間的に結論してしまったのである。

この結論の素早さと、その後のオフィーリヤ詰問の厳しさとが、この場のハムレットの語調の急変となって現れたのであったが、直前のオフィーリヤの勤行を真実のものと見誤ったと思いこんだハムレットの、自分自身の迂闊さに対する怒りと自責の念の強さによってオフィーリヤに対する攻撃が強化されていくのである。こうなると、ハムレットに冷静な判断を期待することは全く不可能となる。ハムレットのような、自分の認識と判断力に絶対的信頼を寄せるタイプの人間にとって、自己判断の誤りは許し得ないものなのだ。王子はオフィーリヤの祈りの「振り」(seem)を——実はオフィーリヤは心から祈っていたのであったが——誤って真実の祈りであると「見て」(see)しまった、と思い込む。そう思い込む端緒は、オフィーリヤがハムレットから貰った贈物を返却したいと申し出た「ことば」を聞いたことであった。彼女の言葉は言葉以上のものでなかったのであったが、彼はそれを彼女の真実、リアリティであると判断したのである。

省れば、そもそも最初にオフィーリヤの誠実を王子が疑ったのも「ご交際を御遠慮したい」(2.2.142)という言葉がきっかけになっていたのである。つまりハムレットはオフィーリヤの真実を何も見てはいなかったのだ。ハムレットという人間は自分が相手を見透したと思いこむと、その自分の判断を言葉によって表現し客観化し、一般論をひき出すことに、自己の青春を費やして来た人間なのである。こうして彼は如何なる時、処においても直ちに対象に反応し、一見適切に見える即妙の返答が出来るように一般論のストックを自分の中に蓄積し続けて来た結果、殆どあらゆる場合、物、人物に当てはまるだけの量と種類を誇る形而上学のノートを頭の中に造り上げていた。かつて王子は、周りの者から「殿下なにをお読みですか」と問われた時、「ことば、ことば、ことば」と戯れに答えたのは、だから決って言葉の綾なのではない。王子にとっては

いつの間にか自分の言葉と形而上学がリアリティになっていたのである。

こういう訳であるから、「尼寺の場」においてオフィーリヤの「計略」を見抜き、オフィーリヤ＝ガートルード＝娼婦性ということを確認し得たと王子が思った瞬間、王子の口からオフィーリヤに向けられる言葉は激越なものとなり、さらに進んでは、“Are you fair?”（あんたは清い女なりや？）という謎めいた言葉にはじまるころの、彼一流の偽善論、娼婦論へと急傾斜していったことは少しも不思議なことではなかった。しかしながらオフィーリヤは、王子が説明し形容するような存在とは最も遠くかけ離れた存在なのである。「ハムレット」の中で言葉を発すること少なく、またハムレットの身を案じての場合を除いては言葉を口にする時に最も不確かで自信の無いのはオフィーリヤなのであるが、このことは彼女の実体と言葉との乖離が極小であることの証左にはかならない。彼女はいわば不純な言葉による理解を拒む、それを超えた、未成熟ではあるが無垢で純なるものそれ自体なのである。

王子はオフィーリヤを見誤り、誤った判断を下し、的外れのオフィーリヤ像を自分流の言葉で表現したのだった。しかしハムレットの言葉がオフィーリヤにとっては理解不能の訳のわからないものに聞えたことは言うを待たないだろう。イノセントなオフィーリヤにはイノセントならざる者の典型と言うべきハムレットの不思議な恐ろしい言葉は理解し得ないのである。だが不幸なことに彼女は心底ハムレットを愛していたために、王子との関連性が彼女の存在の意味であり、彼女は王子との関連性につれて動揺する存在なのであった。であるから、今その当の相手から過激な言葉を投げつけられて拒まれたことは、到底耐え得ない衝撃となってオフィーリヤを打ちのめしてしまうのである。

やがて時移り、王子の手にかかって父が横死する痛ましい事件が起り、彼女はデンマークという「牢獄」における現実的生存の手がかりも失ってしまう。恋人に去られ、父の死にも遭遇し、生の意味と基盤とを喪失したオフィーリヤは、時折王子の恐ろしい言葉（「尼寺へ行け！」）を想起し、その都度「わ

からない。わからない。」とつぶやいたのだったが、いつか知らぬ間にそのつぶやきはヴァレンティンの恋歌になっていた。それは優しい民謡の世界であり、彼女が理解出来る言葉の世界であった。そしてこの民話俗謡の世界の中に在るものたち——野の草花、風の香、陽光、小川の流れなど——の間に入ると彼女は自由に自然に言葉が口をついて出てくるのであったが、それは当然のことであった。即ち、オフィーリヤ自身がそれらの仲間であり、いわばオフィーリヤはそれらの美しく純なるものの象徴だからである。

ハムレットが自身の身のまわりの対象の中に見い出すことが出来ず、そして結局失ってしまったものは、オフィーリヤを含めて、彼女によって代表される自然と人生の中の美しく優しく健全な側面であったと言えるだろう。そして王子がこの事実に気がつくのは、累々たる犠牲者の間に立って自分の死期を悟った時であった。その時彼は言葉や哲学によって表現し理解し得ないものの存在にはじめて気づき、それ故に自身に対して沈黙を課するのであるが、それは文字通り王子が発する最後の言葉となった。

「あとは無言。」

(5. 2. 350)

注(1) *Works of Samuel Johnson*, ed. Arthur Sherbo (New Haven, 1968) viii. p. 1011.

(2) Kenneth Muir, *Shakespeare's Tragic Sequence* (London, 1972) p. 115.

(3) J. Dover Wilson, *What Happens in Hamlet* (Cambridge: The University Press, 1935), reprinted in *Hamlet: Enter Critic* (New York, 1960), p. 276.

(4) Irvig Ribner, *Patterns in Shakespearean Tragedy* (New York, 1962), p. 73-74.

(5) Hamlet I, i, 115-121, in *The Complete Works of Shakespeare*, ed Peter Alexander (London, 1985) All quotations from Shakespeare are from this edition.

(6) Salvador de Madariaga, *On Hamlet* (London, 1948) Chapters II and III. Rebecca West, *The Court and the Castle* (Yale University Press, 1957).

(7) R. S. White, *Innocent Victims* (London, 1986), p. 71-72. 本拙論はホワイトの論に負うところが多い。

- (8) 大岡昇平著「ハムレット日記」p. 84 (新潮社)
- (9) *Passages from the Prose and Table Talk of Coleridge* ed. W. H. Dirks (London, 1894), p. 202.
- (10) Ulrich Bräker, *A Few Words About William Shakespeare's Plays* (London, 1979), p.
- (11) Irving Ribner, p. 74.
- (12) Robert Burton, *The Anatomy of Melancholy*, ed. H. Jackson (London, 1932) Third Partition, Memb. 3.
- (13) Maynard Mack, "The World of Hamlet". *The Yale Review*, XLI (1952), 502-523. Reprinted in Leonard Dean, ed. *Shakespeare: Modern Essays in Criticism* (New York, 1961), p. 255.